

相模女子大学 体育館

正会員 浅石 優 君
正会員 米澤 彰 子 君

大学正門から並木道が延びる。その左右には設計者による 100 周年記念館および新本館があり、その奥には校舎群が並ぶ。コンパクトであるが質のよいキャンパスである。この一面にある体育館は、両側の分厚いコンクリートコア間をステンレス板が浮くかのようにアリーナを覆っている。ステンレス・スタンディング葺きのベコベコした壁面に反射する光の揺らぎが空気の中で拡散し、映り込む風景は歪む。この歪んだ外観素材は、周囲の風景を変形した粒子により抽象画のように映し出しており、大学側も好感をもってこれを受けとめている。

四隅は換気のためにカンティレバーによる処理をしており、地窓によるグランドレベルのデザインをともなって、壁は地面から浮いて見える。この体育館は、外観のみならず内部においても垂直および水平面の存在と浮遊がこの建築の空間をつくっている。

アリーナに入ると浮遊する壁と天井があり、その隙間から洩れる光がなんとも印象的である。

壁は、地窓により床から浮き、天井と壁の隙間からはスリット状のトップライトからの光が洩れる。この水平面と垂直面は接することなく構成され、面は浮遊する。それがこの建築空間の魅力となっている。これまでの体育館の箱の閉合性とは異なり、この作品では面の浮遊による開放系の空間を生んでいる。

ミーティングルーム、トレーニングルームなど諸室をコンパクトに内包した 2 つのコンクリートコアは水平力を担い、鉛直荷重を担う鉄骨架構はスレンダーな構造である。鉄骨梁と柱の面をフラットに表す洗練されたディテールとともに、さらりと綺麗な体育館に仕上がっており評価に値する。

有孔板は内壁面と天井面に使われ、フラットな内部空間の反響が抑えられている。

練習用バスケットコート 2 面を取めた小振りな規模であり、その程よいスケールのこの体育館は、周囲の校舎群とともに質のよいキャンパスを形成している。そして建築的には面の浮遊による開放系の設計手法による空間がシンプルで美しくつくられている。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。